



イタイタイ病を
語り継ぐ

語り部 コーナー

今回紹介する「語り部」さんは、若林カズ子さんです。

若林さんは、1957（昭和32）年に現在の富山市婦中町に嫁いでこられました。夫の祖母であるセキさんが、イタイタイ病認定患者でした。大好きだったセキばあちゃんと過ごした11年間の思い出をハキハキと語られる若林さん。時折、ハンカチで涙を拭われる場面もあり、被害の実態が、聴講者の心に深く刻み込まれています。

『私の^{わかばやし}抱負』若林カズ子さん（77歳）



嫁いで来た頃のセキばあちゃんは、大きな体格でしたが、体が「くの字」に曲がっていました。「痛いよ。痛いよ。」とっては、握りこぶしで腰や足をたたきながら、農作業に励んでいました。症状が進み、床に伏すようになってからは、食事をとるのも辛い状態なのに、「痛い」「痛い」という大きな声が部屋中に響き渡り、着物はいつも汗と脂で湿っていました。風呂に入るのも、二人がかりでハンモックに乗せて運ぶという大変なものでしたが、家族みんなおばあちゃんが大好きでした。

しかし、さらに症状が悪化した1968（昭和43）年の大晦日。「あんちゃん、抱っこして・・・」との願いを最後に私の夫の腕に抱かれ、86歳で亡くなりました。骨が溶けたように体が小さく、若い頃の体格からは、想像もできませんでした。

痛みに絶えながらもいろんなことを教えてくれたセキばあちゃんが、苦しみ亡くなった現実を、元気な体が続く限り、訴えています。

語り部講話の聴講者を募集しています
対象は10名以上の団体で、事前申込（先着順）
が必要です。
詳しくは資料館のホームページをご覧ください。



語り部講話の感想

イタイタイ病になった方々は、本当につらく苦しい思いをして、生きたんだなあ、あらためて感じました。（小学生・女子）

イタイタイ病は、骨が溶けたように小さくなり、軽くなるからすごい怖い病気だと思いました。そして、絶対にこの病気を繰り返してはいけないと思いました。（小学生・男子）

涙がとまりませんでした。イタイタイ病のことは知っているつもりでも、実際にお話を聴くと、環境と健康の大切さを実感できました。（40歳代・女性）

実体験にもとづく話は、胸に迫る。多くの先人の方の苦労の上に今の平穏な生活があるのだと感じた。とくに若い人たちにこの歴史を伝えていかなければならない。（50歳代・男性）